
先輩は.....

サヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先輩は……

【Nコード】

N3869Q

【作者名】

サヤト

【あらすじ】

これは作者に実際に起こったことです。
真実9割、うろおぼえ1割です。

僕は小学4年生の時からスポーツ少年団でバレーボールを続けてきた。

そのスポ少は全国に4年連続で出場している強豪だった。

僕たちの代は5年連続を賭けた年だった。

しかし僕たちは負けた。

決勝で負けた……とかならまだマシだ。

しかし僕らは初戦で負けた。

僕たちは先輩に憧れていた。しかし所詮しょせん憧れは憧れだった。

そうして僕たちは中学生になった。

僕は中学生になった。そうしてバレーボール部に入部した。

本当は、野球部に入ろうとしていたが、スポ少の友達にはば無理やりな感じで入部させられたのだ。

体育館では1つ上……つまり僕たちの憧れの先輩が練習をしていた。三年生でレギュラーになっているのは、3人しか、いないようだ。

つまり、3人は二年生、リベロも含めると半分以上の人が2年生

である。それほど、先輩たちは、バレーボールが上手だった。ほかにも部員は三年生が6人、二年生が7人、一年生が僕を含めて6人の合計21人いた。

まあ、そんな環境の中、僕はやる気は起きず毎日ダラダラ過ごしていた。そんな姿が気に食^くわなかったのか、二年生の一部^{いちぶ}の人が僕に難癖^{なんくせ}をつけるようになった。

最初は小さなものだったが……それがだんだんエスカレートしていった。それが一年生の一部に広がった。すると部活内から学年に広がった。よくある？いじめ？というやつだ。

部活をやめて、ほとぼりが、冷めるのを待てばいい話だった。しかし僕はそんなことはしたくなかった。なぜなら、部活をやめると、いじめていた人たちに負けた気がするからだ。

そんな日々が続き、三年生が引退した。

それから2カ月後の日曜日、僕たちは大会で県で一番大きい体育館に来ていた。一回戦^{かいしちゆう}を快勝し、観客席で休憩をとりながら、次の対戦相手の試合を観戦していると監督に言われた。

僕は、言われたとおり僕はしていた。しかしほかの一年生は、言うとおりにしていなかった様だ。気づいたらほかの一年がいなくなっていた。

すると先輩の一人がそのことに気づいたのか
「ほかの一年はどこ行った？知らないのなら探して来い」

そう言われたので、『自分で探せよ!!』という気持ちを抑えて探しに行くことにした。

僕は一年生を探すために競技場を出て、館内を探し回った。県で一番大きい体育館ということと大会があるということが重なって人がたくさんいた。そのせいで見つけるのに15分ほどかかってしまった。僕が彼らを見つけたとき、彼らは鬼ごっこをしていた。彼らは一階にいたので、二階にいたので下に行く必要がある。そう思い僕は階段を下りていった。

一階についてさっきまで彼らがいた場所を探してみる。しかし彼らはどこにもいなかった。さらに15分ほど探し見つからないので僕は先輩たちのところへもどることにした。

もどった時には、すでに僕以外の一年生全員がしっかり座って試合を観戦していた。

「——はああ」
溜息をつきながら椅子に座ろうとする僕に『一年生を探して来い』と命令してきた先輩が声をかけてきた。

「おい！」

「なんですか？」

「お前さっきまでどこに行っていた？」

僕は心の中で『はあ？ テメーが命令してきたんだろぅが！ ざっけんな』と思ったがもちろん声には出さない。 出せばまためんどくさいことになる、なのであたりさわりのない様に答えることにした。

「えっと、先輩に言われて一年生を探していたのですが？」

「ハイハイ、言い分けはいいからどこで遊んでいたんだ。 ああん？」

ボコ

それを言うと同時に僕の背中を殴ってきた。 なんて理不尽なと思
い、泣きそうになった。

実際は、泣いていたかもしれない。

そこへもう一人の先輩が話に入ってきた。

「どうしたんだ？」

これは、僕を助けに入ってきた声ではないことが一瞬でわかった。
なぜならさっきまでこちらを見ながら笑っていたからである。

「なるほど……調子に乗ってんなよ！」

と僕に言うと同時にさっきの先輩と同じく僕を殴ろうとする――
がいつまで経つても痛みはこない。 なぜだろう……恐る恐る目をひ
らいてみる。 すると先輩の拳が目の前で静止画のように止まってい
た。

「その辺でやめとけ」

見上げてみると先輩――横道 健誌先輩が、殴ろうとしている先
輩の腕をつかんでいた。

健誌さんは、とても不思議な先輩だ。

あまり人と話すことがなく、いろんなことに無関心な先輩だ。そしていつもヘラヘラしている。

それなのに友達がとても多く部活が始まる前によく友達と会話（健誌先輩は話を聞いているだけ）をしているのをよく見かける。

しかもバレーボールはとても上手く、このチームのエース……ではないが別のチームならほぼ確実にエースだっただろう。

（なぜこのチームでエースになれないのかというとこのチームのエースがJOC「県内バレーボール代表みたいなやつ」の選手に選ばれるほどである）

そんな先輩が僕を助けてくれたのだ。その時の健誌さんの顔は、いつものヘラヘラした顔とは少し違った。

やさしい顔であり、そしてこわい顔でもあった。

そんな顔を見た先輩たちは「わかったよ」と言って引き下がった。おそらく健誌さんが怒るとは微塵（みじん）にも思わなかったのだろう。

「だいじょうぶか？」

健誌さんは、そう言ってくれた。

今まで誰もかけてくれなかった言葉を健誌さんは言ってくれた。

僕はその時、涙が流れた。

「……………」

僕は、なにも言わずに泣いていた。

「……すいません、ありがとうございます……」

少し裏返った声でそう言った。

——大会は問題なく勝ち進み、優勝した

その後も、僕はいじめをうけていた。

しかし健誌さんがいつも、とめてくれる。

学校に行くのが嫌になって、サボった日があった。そんな日も健誌さんが電話で「どうしたんだ？」と聞いてくれる。

僕は、そんな健誌さんになにも返せないまま終わるのか？いつか卒業していつてしまうのだ。いや卒業式より先に部活を引退するだろう、だから現実をもっと速く別れが来る。

そんなことを思っている、しかしあつという間に時は過ぎていく。健誌さんたちの部活の引退は、少し伸びた。勝ち進んで、上の大会に行ったのだ。

その頃になると、いじめもなくなっていた。すべて健誌さんのおかげだった。

なにか健誌さんにしてあげなければ……
そんなことを思っていると、ホイッスルの音が体育館に響き渡った。
いつの間にか、試合が終わっていた。

試合後、先輩たちが泣いていた。

僕を殴ろうとしていた先輩たちも泣いていた。

これは、以外だった。

健誌さんは……泣いていなかった。しかし代わりにこんな事を言っ
た。

「あーあ、負けちゃったよ」

笑顔で言った

後悔を微塵もしていないという笑顔で言った。

そうして先輩の夏は終わった。

僕は健誌さんがいなければ、僕は学校に行っていなかっただろう。

健誌さんがいなければ僕の人生は色々悪い方向へ転がっていただ
ろう。

そう思い、笑っている健誌さんに僕は言った。

「ありがとうございます」

この時、僕は一つの疑問を持った。
なぜこの人は、負けたのに笑顔なのか？
そんなことを僕は思った。

先輩たちは進路を決める時が来た。どこの高校へ行くか決める時がきたのだ。

健誌さんは県で一番バレーボールが強い高校から推薦がきた。ほかに二つほどの高校から推薦状がきたらしい。

しかし健誌さんはすべての誘いを断り、県で三番目ぐらいに？バカ？な高校に通うことにした。

なぜだ！？健誌さんの力なら推薦のきた高校でも十分、力は通用するだろう。しかしなぜ！？僕はそう思い聞いてみた。

「健誌さん」

「なに？」

穏やかに僕に答えてくれる

「健誌さんはなぜ推薦を踏み捨ててまであの高校を受験したのですか？特にバレーボールが強いわけでもないですよね？」

「そんなの決まっているじゃないか。家が近いからだよ」
そう軽く答えてくれる。

—— 本当に不思議な人だ……

僕はそこまでバレーボールが上手かったわけではなかった。下級^{かきゅう}生にレギュラーをとられるほどだ。しかし僕は必死に練習をした。そうしているといつの間にかレギュラーになっていた。

そうして僕らも進路を決める時がきた。僕は推薦状がきた。それほどバレーボールが強いわけではないが、県でもベスト4くらいには入れる強さだ。

しかし僕はこの推薦を断った。

僕は県でも三番目くらいにバカな高校に入ると先生に言った。先生は、少し反対した。親は大反対だった。僕の学力は校内トップ10に入るくらいだったので、先生たちはトップクラスの高校に行くだろうと思っていたのだろう。僕は、ほとんど無理やりな感じでこの高校を受験した。

受験後、僕は親や先生にこう聞かれた。なぜその高校に行こうとした？

僕は軽くこう答える。

「あのと同じコートに立ちたいから……立てばあの人があの夏なにを思っただ笑っていたかわかると思うから……」

そう、あの人は僕を助けてくれた。

あの人は僕を変えてくれた。

あのと同じコートに立てれば、なにか見えそうな気がする。

僕は、まだあの人になにも返せていない。だから僕はあのと同じコートに立ち、高校でバレーボールを1秒でも長く続けてもらうために、

——僕は、そう決めた。

（後書き）

若干長いこの文を最後まで読んでくれてありがとうございます。
よければ、感想等をお願いします。
誤字脱字等があれば教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3869q/>

先輩は.....

2011年1月28日04時49分発行